

令和 2 年 9 月 16 日現在

機関番号：33109

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12495

研究課題名（和文）ひきこもり支援におけるファシリテーター養成を核とした親の会との連携システムの構築

研究課題名（英文）Construction of a collaborative system with a parents' group centering on facilitator training for hikikomori support

研究代表者

齋藤 まさ子（SAITO, MASAKO）

新潟青陵大学・看護学部・教授

研究者番号：50440459

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ひきこもり支援の現状を把握するために、新潟県内の保健所と市町村所属の全保健師723名を対象に質問紙調査を実施し、最終的に176名の回答を分析した。約98%の保健師がスーパーバイズを求めており、自ら力不足と感じながら支援に当たる姿が浮き彫りになった。高齢の親を対象とした面接調査、支援者への面接調査、本人の心理状態の分析、会のリーダーへの面接調査、ファシリテーター養成のための学習会を実施した。親の会と支援側の連携・協働の強化、親の会の知見の有効活用、両者が即興的に結び合える日頃からの関係構築、継続した学習会の実施などが考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

親の会（会）と専門的な知見に基づいた支援者との連携の形を提示できたことは、今後支援者、行政の専門職、保健師などの支援の質の向上にどうつなげればいいのかのヒントとなる。また、会の今後のさらなる活動を促進させるために、行政は財政面や広報などへの協力、専門的知見を有する支援者は会の運営へのスーパーバイズ等の協働体制をとる必要性も提示できた。また、ファシリテーターとなる人たちが、個人的な体験だけに依拠することなく、バランスの取れた運営力を発揮する力を得ることは、参加者の減少の抑止と増加の可能性、が期待できる。会のない市町村で新たに開設する可能性も考えて、養成講座なども実施する手掛かりになったと考える。

研究成果の概要（英文）：In order to grasp the current situation of hikikomori support, a questionnaire survey involving all public health nurses working for public health centers or local governments of Niigata Prefecture was implemented. The responses of 176 subjects were ultimately analyzed. The results demonstrated that approximately 98% of the public health nurses wished to be supervised and were providing support while feeling incompetent. The following activities were implemented: interviews of elderly parents, support providers, and the Parents' Group leaders, analysis of the psychological state of individuals with hikikomori, and workshops for training facilitators. Hikikomori support can be improved by enhancing cooperation/collaboration between the Parents' Group and support providers, using insights from the Parents' Group effectively, building a relationship on a daily basis that enables impromptu connection between the two parties, and implementing workshops continuously.

研究分野：精神看護学

キーワード：ひきこもり 自助グループ親の会 リーダー ファシリテーター 連携・協働

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ひきこもり状態の人(本人)への親の対応が、批判的なものから理解的態度に変化することが、ひきこもりの長期化や高齢化を抑止するための重要なファクターである。親が理解的態度に変化するために、ひきこもり親の会(会)の存在は重要であるものの、会のファシリテーターの運営が、必ずしも組織の目的や支援の仕方に反映されていないという問題が見出された。そこで、2016年に新潟県内で募集したひきこもりの親14名を対象に、親が子どもに対して理解的対応に変化することを到達点として、研究者らが開発した家族支援プログラムによる家族教室を実施しループリックで評価したところ、親の心理面・行動面にポジティブな変化が見られた。

一方、子どもの年齢により対応も異なる部分があり、両方別々の対応は困難であるという実施上の課題や、個々の家族内の人間関係などの困難な事情があり、細やかな個別対応の必要性が課題として残った。これらの課題をクリアするには、ファシリテーター役(実質は会のリーダー)がピアだからこそできる個別的な支援を行うなど、各地で活動する親の会と連携することが最も現実的で適切であると考えられた。しかし、会への参加人数は実際のひきこもりに悩む親の人数と比べてごく一部である。また、ファシリテーターの進行や態度への不満等も聞かれていた。

2. 研究の目的

(1) 親の会とスーパーバイザー(専門的な知見に基づいた支援者)が連携し、親の会の参加人数が少数であることや、ファシリテーターの進行や態度に関する不満を抱くという課題に対応できるようなファシリテーターの養成や、親の会と地域との有機的で機能的な連携システムの構築を目的とした。

3. 研究の方法

実態を知るため、下記の調査を実施した。

(1) 新潟県内の保健所でひきこもり支援に当たる保健師を対象として、支援の実態に関する質問紙調査を実施する。対象は県内の全保健所とする。

(2) 学齢期で不登校となった子どもの母親を対象とした面接調査を実施し、気持ちの変化のプロセスをM-GTAで分析する。

(3) ひきこもりの親であり、65歳以上で年金生活をする人たちに面接調査を実施し、心理面の実態を質的機能的に分析する。

(4) ひきこもり経験者が刊行する雑誌に述べられている内容を質的統合法(KJ法)で分析する。

(5) ひきこもり支援者の体験や求める支援について面接調査を実施し、質的統合法(KJ法)を用いて分析する。

(6) 現在活動中の会のファシリテーターに、会の運営に関する面接調査を実施し、大切にしていること、困難感、社会へ向けた思いなどを聴き、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)により分析する。

(7) 会と専門的な知見に基づいた支援者であるスーパーバイザーとの有機的な連携の姿の提案。

(8) (1)-(7)及び基盤C(2011-2013)(2014-2016)で得られた知見を統合したテキストの冊子化。

(9) 会のファシリテーター養成を目的とした学習会の実施。

4. 研究成果

(1) 保健師調査から見えた新潟県内の現状と課題から

2018年7-8月に、新潟県内の保健所、および市町村所属の全保健師723名を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は、保健師の属性、ひきこもり支援の現状(ひきこもり支援経験の有無、支援件数、ひきこもり当事者の属性や相談内容等)、ひきこもり支援時に感じる困ったこと等である。【結果】346名より解答があり、過去2年以内にひきこもり相談支援を経験ありとした182名のうち、すべてに回答した176名に対する集計を行った。本調査から次のことが示唆された。

ひきこもり相談は継続支援事例が62.1%で単発支援事例は28.5%であった。相談者は本人の状況を把握しやすい同居者やその支援専門職が多く、来所相談が多い(表1)。本人の属性は、男性が多く、年代は20,30,40歳代はほぼ同率だが、本人の年齢が中高年以降の相談開始となった者は全体の約4割であった。相談内容は、医療機関の受診のさせ方が最も多かった(表2)。

保健師の対応は、表3を参照のこと。保健師のひきこもり支援に関する課題として、保健師自身のひきこもりの特性に応じた支援技術不足や相談支援技術向上に関する支援体制、約98%の保健師がスーパーバイザー設置の希望、社会資源不足等の制度に関することが示唆された。

表1 相談方法

	来所相談 人数(%)	電話相談 人数(%)	メール相談 人数(%)	その他 人数(%)	不明 人数(%)	合計 人数(%)
本人	49(37.7)	33(25.4)	1(0.7)	47(36.2)	0(0.0)	130(100.0)
家族	285(55.7)	121(23.6)	2(0.4)	94(18.4)	10(2.0)	512(100.0)
家族外	39(35.5)	46(41.8)	1(0.9)	19(17.3)	5(4.6)	110(100.0)
合計	373	200	4	160	15	752(100.0)

人数は延人数

表2 相談内容

相談内容	人数
本人への関わり方	
昼夜逆転の対応	44
自傷行為への対応	17
同居家族に対する暴力への対応	42
強迫行為への対応	24
医療機関の受診のさせ方	115
就職を促す関わり方	81
登校を促す関わり方	28
整容(身だしなみ)を促す関わり方	33
周囲への関わり方	
家族以外への迷惑行為等の対応	24
相談者自身に関する事	
本人の世話をを行うことへの身体/精神的負担	52
経済的負担への制度利用	53
その他	
将来への不安	129

*複数回答

表3 ひきこもり相談時(本人)における保健師の対応

		単発事例	継続事例
		人数	人数
情報提供(社会資源)	医療機関の情報提供	3	15
	居場所に関する情報提供	5	12
	地域活動支援センターの情報提供	4	5
	若者サポートステーションの情報提供	5	6
	ひきこもり相談支援センター情報提供	0	1
相談窓口紹介	障害福祉担当課の紹介	1	11
	教育部門担当課の紹介	0	0
症状への対応	医療機関受診勧奨	5	22
	身体的不調への対応	6	21
	精神的不調への対応	7	16
	家族等への関わり方の助言	3	13
事後措置	教育機関への連絡	1	2
	家庭訪問実施	7	24
その他	情報提供先の見学等の同行	1	5
	その他	0	0

*複数回答

3) 年金生活をする高齢の親を対象とした面接調査

研究協力者は、10年以上ひきこもる子をもつ65歳以上の母親5名であり、60歳代2名、70歳代3名であった。子どもは、男性が4名、女性が1名であり、ひきこもり期間は10-34年であった。全員が年金受給し生活していた。半構造化面接による聞き取り調査を実施し、親の変化に注目してカテゴリーの作成と関連性を明らかにした。

【結果】親はひきこもりの長期化の中で疲弊し、親としてのエネルギーの枯渇を体験している。子に対する離れたい思いと子を見放せない思いの両者の間で揺れながら、共依存的二者関係の状態では抜け出せないでいた。親は自分の老いも重なり、家族の将来設計ができずに不安と諦めが交錯していた。ひきこもりの長期化で、心労、経済負担、社会的重圧からくるストレスへの支援が重要である。また、家族教室が安らぐ場となる実感を経て、ひきこもりを改善するのではなく居心地のよい家族として生き直すという支援を持つことで、家族の再構築を図っていた。すなわち、親が変化することで家族が再生し、本人の社会に向けた行動変容につながることを示唆された。ひきこもりの長期化と高年齢化問題に対応するため、実行可能性があり、高年齢化した本人および親に対応できるように個別的なレベルでの支援の具体策の検討が求められる。

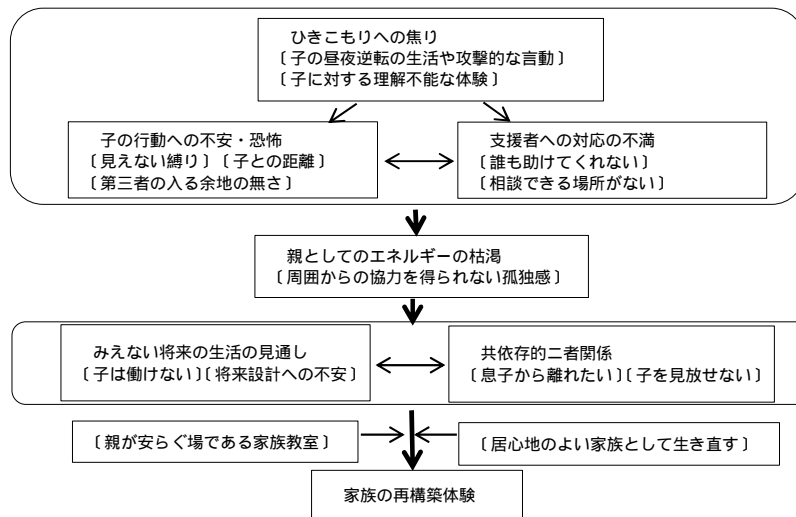


図1 精神的ストレスと対処への困難の変化と関係性

『地域包括支援センターにおける「8050」事例への対応に関する調査報告書』³⁾を参考資料として作成

(4) 社会とつながりつつあるひきこもり体験者の心理状態

本研究は、ひきこもり当事者の心理状態を明らかにすることを目的とした。特に、社会とつながりつつある当事者の心理状態に焦点を当て、ひきこもり当事者・体験者の声を発信している雑誌を対象に、質的統合法(KJ法)を用いて分析し検討した。本研究で浮かび上がってきた社会とつながりつつあるひきこもり当事者の心理状態は、「当事者同士の集まりで弱さでのつながり感を持ち、刺激を受けながら、自己の考えを転換し、周囲の人への希望を抱きながら前に進もうとしているが、外に出ることへの辛さとうれしさの葛藤は依然存在している状態」であった。

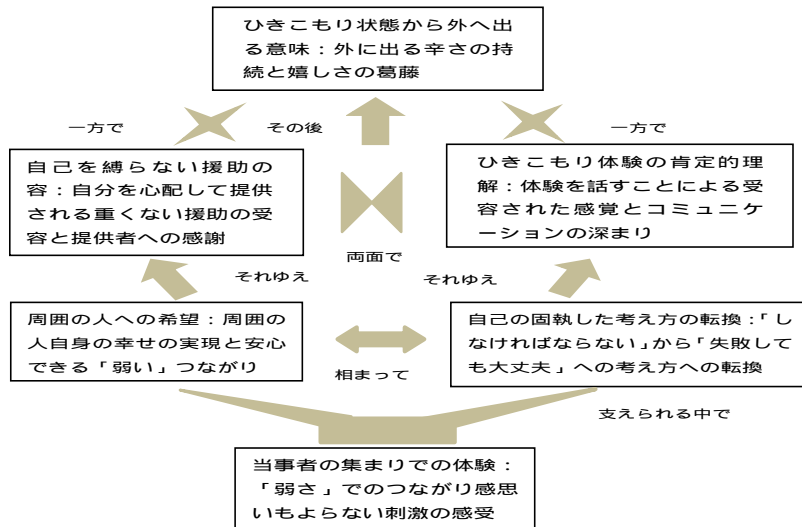


図2 社会とつながりつつあるひきこもり体験者の心理状態

(5) ひきこもり支援者の体験と求める支援

本研究の目的は、ひきこもり支援者の体験と求める支援について明らかにし、ひきこもり支援の在り方について考察することである。ひきこもり支援者3名を対象に、半構造化面接を行い質的統合法（KJ法）を用いて分析した。全体分析の結果、ひきこもり支援者の体験と求める支援について、【本人の生きづらさと傷つき感：社会性の乏しさと自分は駄目だという思い】、【本人や親への傾聴によるエンパワメント：本人に見合った時間の中でのエネルギーの充足】、【本人と親との関係の調整：相互理解と親の変容からはじまる本人の変容と相乗効果】、【社会参加へのプロセス：意欲や自信をはぐくむ本人の困り感や必要性を伴った社会体験の積み重ね】、【本人や親を孤立させない支援：相談しやすい環境と専門家や支援機関による連携】、【支援者を孤立させない支援：支援者どうしの共助とサポート環境の整備】の6つのシンボルマークからなる空間配置が示された。ひきこもり支援において、社会参加に向けた支援や、本人や親、支援者を孤立させない支援が求められる。

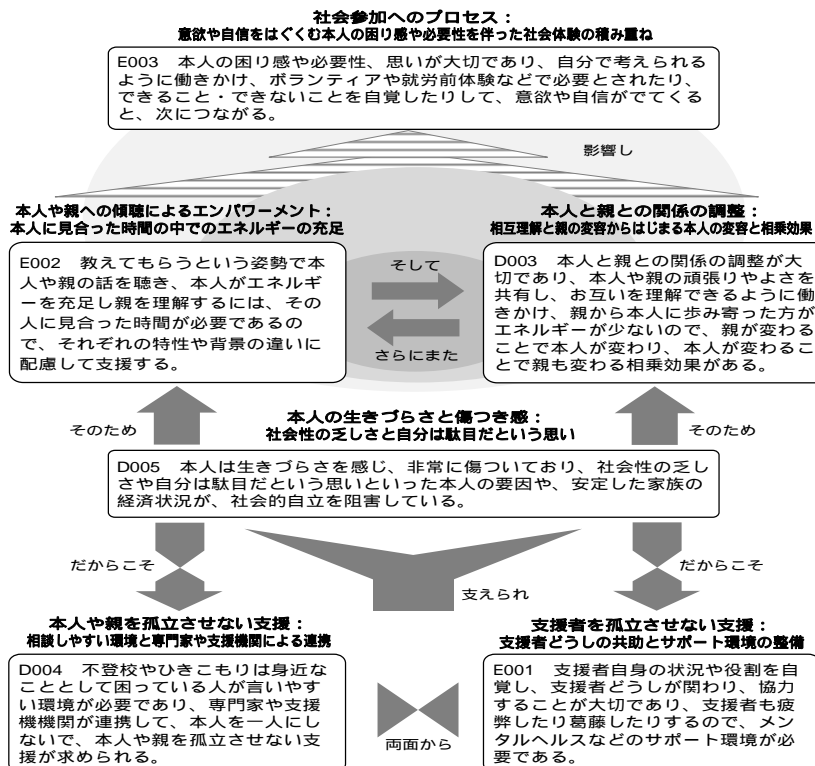


図3 ひきこもり支援者の体験と求める支援（見取図）

(6) 家族会のリーダーの内的体験からみえる支援の検討

本研究の目的は、会のリーダーが、自らの役割の機軸を見出すまでの体験のプロセスを明らかにするとともに、リーダーへの支援の示唆を得ることである。各地で活動する会のリーダー6名に半構造化面接を実施し、M-GTAを用いて分析した。会のリーダーが役割の機軸を見出していく

プロセスは、《実践からのゆるぎない確信》を得ることによって、【羅針盤獲得の後押し】と【社会貢献への使命感】を見出していくプロセスであった。支援は、会を運営するための経済面や専門的な学習への支援などを運営するために必要な支援の他に、【羅針盤獲得の後押し】を促進させるアドバイザー的な専門家の支援の可能性を探る必要性と、【社会貢献への使命感】に依拠して、会などに積極的に協力依頼する方向性への示唆が得られた。

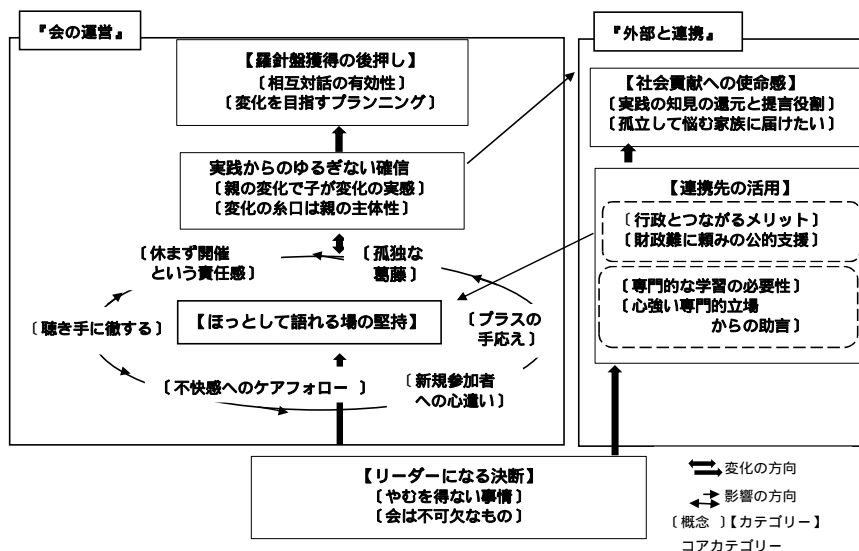


図4 ひきこもり親の会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセス

(7) 家族会と地域とのゆるやかな連携・協働へ

家族会との連携： 会のリーダーは、行政や専門支援機関から経済面や居場所の提供、広報の協力、専門機関からの知識の伝達などを、連携することにより得ていた。一方、リーダーが持つ知見を、孤立化した家族に届けたいという思いとともに、正しい理解の促進を図るために、知見を社会全体に還元したい思いがあった。会と地域との連携については、保健師調査から自身が技術不足と感じており、相談しないまま単独で支援している現状が明らかになっている。支援スタッフが、他機関とノットを結ばず簡潔してしまっているところに限界がある。会とノットを結び、支援スタッフに向けて知見や支援のノウハウを伝える場を設ける、支援の場で困ったときに即興的に相談できるネットワークが可能となれば支援の質の向上に貢献できるものとする。

必要な時に結び合える、主体的でゆるやかな協働・連携： 各機関や各個人が計画的、あるいは現場での差し迫った必要から即興的に結んだ機関や個人について、ネットワークなどの情報提供できる場があると、支援の輪が広まっていく。この輪の広まりは、多様な背景や状況への支援のニーズに対応するために必要不可欠なものであり、“多面的な支援が無理なくできる”というメリットにつながる。家族会、各種 NPO 団体、地域若者サポートステーション、行政、大学などが、普段から顔の見える関係構築し、必要に応じて人や機関が主体に結び合える、そのような協働・連携に姿がこれからのひきこもり支援の1つの在り方であろう。ここでは、行政が参加した民間のネットワーク「ひきこもりサポートネットにいがた」を紹介しながら、論を展開した。

文献

- ・ユーリア・エンゲストローム「ネットワークする活動理論 チームから結び目へ」新曜社、2013
- ・山浦晴男「質的統合法入門 考え方と手順」医学書院、2012
- ・石崎森人ほか編集「HIKIPOS:01-05」HIKIPOS、2018-2019
- ・木下康人「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」弘文堂、2013

(8) 書籍「ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて」

部構成で、第1部「ひきこもりの概要」、第2部「自助グループ家族会・支援として行う家族教室の実際」、第3部「有機的な連携構築」である。特に第3部は新潟県内を中心とした家族会の主催者が、会の成り立ちや活動について書いており、これから会を立ち上げる人、あるいは会を運営する人の手助けになるものと期待する。県内の保健、福祉、教育等の機関に配布した。

(9) 会のファシリテーター(リーダー)養成を目的とした学習会の実施

2019年11月新潟青陵大学において、新潟県内からひきこもり家族会に興味のある家族を募集し、2日間にわたり学習会を実施し、14名(父2名、母10名、姉、本人各1名)が参加した。実施の目的どおりに広報した場合の集客を考慮し、家族会に興味のある人を募集する形をとった。内容は家族や家族会について、会の運営者の体験談、会に関するファシリテーションなどであった。アンケートでは、「リーダーの多様な考え方や運営の苦勞を聞いた」、「ファシリテーションで意見交換ができた」など、全員が「かなり満足した」と回答した。参加している会の改善点は「本人と交流したい」、「後継者が欲しい」、「マンネリで傷のなめあい」、「もっと広報が必要」などの意見があった。親の会への関心は全員が高まったと回答したが、会のリーダーを引き受けることについては、14名中2名が肯定的に、12名が躊躇すると回答した。今後は、自助でありながら行政との連携・協働の形で運営する会の姿を提案したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 斎藤まさ子	4. 巻 12
2. 論文標題 ひきこもり親の会のリーダーの内的体験からみえる支援の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新潟青陵学会誌	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村恵子	4. 巻 12
2. 論文標題 ひきこもり支援者の体験と求める支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新潟青陵学会誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内藤守	4. 巻 12
2. 論文標題 社会とつながりつつあるひきこもり体験者の心理状態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新潟青陵学会誌	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 斎藤まさ子
2. 発表標題 ひきこもり親の会の代表者の体験の様相
3. 学会等名 第25回世界心身医学会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村恵子
2. 発表標題 ひきこもり支援者の体験
3. 学会等名 第25回世界心身医学会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内藤守
2. 発表標題 ひきこもり経験者の人とつながる体験
3. 学会等名 第25回世界心身医学会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田辺生子
2. 発表標題 新潟県の行政機関に勤務する保健師によるひきこもり支援の現状
3. 学会等名 第25回世界心身医学会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林理恵
2. 発表標題 長期にひきこもる子を支える高齢化した親の体験
3. 学会等名 第25回世界心身医学会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 斎藤まさ子 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ウエストン	5. 総ページ数 14/146
3. 書名 ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて	

1. 著者名 中村恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ウエストン	5. 総ページ数 6
3. 書名 ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて	

1. 著者名 内藤守	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ウエストン	5. 総ページ数 7
3. 書名 ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて	

1. 著者名 田辺生子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ウエストン	5. 総ページ数 6
3. 書名 ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて	

1. 著者名 小林理恵	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ウエストン	5. 総ページ数 4
3. 書名 ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

1. 2019年11月に新潟県精神保健福祉センターおよび新潟市の共催で『ひきこもり「親の会」に関連したひきこもり支援学習会』を実施した。新潟県内にひきこもりの子どもをもつ親と明記して募集し、14名の参加が得られた。家族会の会員、家族会のない地域で日々子どもに対応している母親などが参加した。当初、家族会の会員でファシリテーター（実質はリーダー）に関心のある人、これから家族会を立ち上げようと思っている人を対象に実施する予定であったが、それを明記して募集すると参加が望めないのではないかという懸念があり、表記とした。内容は、研究班（次に紹介）が作成したテキストに沿ったもので、ひきこもりの概要、新潟県内で家族会を運営する3名の方々の立ち上げや体験談、保健師調査の概要、ファシリテーション「親の会に思うこと」などを盛り込んだ。アンケート内容は高評価であり、家族会への参加の意思なども語られた。リーダーを頼まれたら躊躇するかの問いに12名がすると回答した。大変そう、継続への難しさ、知識不足、運営への不安などが書かれていた。躊躇しないが2名いたことや、「これから自分ができることは何か」を模索している記述がみられたこと、さらに家族会のリーダーの役割が見える化した今回の学習会は、何かしら参加者の心に響いた可能性を否定できない。

2. テキスト「ひきこもり家族会と地域との有機的な連携構築に向けて」（全146頁）を作成した。民間、行政、研究班が一体となって作成したものである。3部構成で1部は、ひきこもりの概要（現状、医学的視点、ひきこもりと青年期、攻撃性）、調査研究からみえる支援の方向（これまでの研究9編）、2部は自助グループの県内外の6つの家族会のリーダー執筆による実践報告、個人や有志で立ち上げた2つの家族会の実践、行政が行う6つの家族教室の実践を各担当者が書いてくださった。3部は新潟市の市民によるひきこもりサポートネットにいがたの紹介、最後に気軽に結び合う連携の姿を紹介した。2部の家族会の実践は、今後の運営や立ち上げの参考となるに違いない。2部の個人で立ち上げた家族会は、カフェを利用したものであり、各自がお茶を飲みながら語り合うというものである。有志で気軽に実践できるものとして、今後に示唆を与えるものである。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 恵子 (NAKAMURA KEIKO) (10410250)	新潟青陵大学・看護学部・教授 (33109)	
研究分担者	田辺 生子 (TANABE SEIKO) (30524722)	新潟青陵大学・看護学部・助教 (33109)	
研究分担者	内藤 守 (NAITO MAMORU) (80410249)	新潟青陵大学・看護学部・准教授 (33109)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小林 理恵 (KOBAYASHI RIE) (80581420)	新潟青陵大学・看護学部・助教 (33109)	